

「解放」前中国における郷村教育運動

—中華平民教育促進会をめぐって—

社会教育学研究室 新 保 敦 子

Rural Mass Education Movement in Modern China: Focusing on the Chinese National Association of the Mass Education Movement

Atsuko SHIMBO

I. The purpose of the paper

To analyze the Ting Hsien Experiment by the Chinese National Association of the Mass Education Movement, and to identify problems which existed at the Rural Education Movement in Modern China.

II. Contents

The Mass Education Movement, organized as a National Association in 1923, arose in recognition of the problems inherent in the situation of a vast, neglected population.

While the movement started with a literacy program, it did not stop there, because it took more than literacy to equip the people to cope with the problems of modern life. Beginning with 1929, the point of emphasis of the Movement shifted from extensive promotion of literacy to intensive study of life in the rural district. And there were an attempt conducted by the Mass Education Movement in the Province of Hopei, North China, what is called "Ting Hsien Experiment".

The essential idea of this experiment was to take an entire "hsien", or district, as a unit for laboratory study, in all the aspects that constitute the life of a community. And with the aid of a grant from the Rockefeller Foundation and Milbank Foundation etc., the Association greatly developed its activities.

It was convinced that ignorance, poverty, disease, and civic disintegration were four fundamental weakness of Chinese life. And through study and practical experimentation, a workable reconstruction program has been evolved, with four aspects, Cultural, Economic, Health, and Political, to deal specifically with the four weaknesses, but to be applied as a whole. And for infusion of the Four Fold Program into people's life, "Three Types of Education" were evolved, to reach the people through the three channels of School, Home, and Community.

In Ting Hsien Experiment, serious and painstaking study was made by scholars and scientists. This study, however, was not fully relative to the real life of the Ting Hsien, so it had borne little fruit. And in 1937 when the War of Resistance Against Japan began Ting Hsien Experiment ended.

I. はじめに

中国近代史においては、その歩みの紆余曲折に対応するかのようになり、多くの教育運動が消長していった。それらはいかにして、列強の蹂躪に甘んじている祖国を強国ならしめ、近代化を実現するかという模索の過程で生ま

れてきたものである。この中でも郷村教育運動は、中国近代教育思想を理解する上で、重要な意義を持つものと考えられる¹⁾。それは従来近代史の中で、顧慮されてこなかった農村に目を向け、農村の教育を振興し、新しい人間を創造することで、郷土の再生を希求する運動であった。この運動が登場してきた背景として、民国成立以来、帝国主義諸国の中国侵略に伴う農村の自給自足経済

の崩壊や、土地小作問題等の諸要因によって、農村部が破産の状況に瀕していたことがあげられよう。そして1919年頃から運動の萌芽期の活動が開始され、1920年代後半に大きく展開していく。さらに1930年代前半に最盛期を迎えたが、以降は日中戦争の戦線拡大と、国民党の農業政策に包絡され停滞していく。

郷村教育運動は、思想的潮流や性格等を異にする諸団体が複雑に錯綜しながら展開していった。その中でも、晏陽初を中心とする中華平民教育促進会（以下平教会と略称）の河北省定県での実践は、人員・資金・計画等の各面において大規模なものであり、郷村教育運動史上、最大の事業と考えられる。本稿の課題は、解放前における郷村教育運動を平教会の定県での取り組みに焦点を当てながら分析し、その意義と限界とを解明することにある。

平教会は成人教育の分野で大規模な活動を展開した重要な民間組織であるが、1923年に五四運動以来の平民主義（民主主義）の潮流の中で創設され、アメリカ帰国留学生をその中核としていた。そして彼らは教育の機会均等を指向し、当初は都市の成人文盲を対象とする識字教育を実施していた。しかし農村部の深刻な閉塞状況を背景に、無知と貧困に喘ぐ農村へ下放し、定県において実験工作を実施する。

平教会の実践は元来、民間教育運動として政府から独立してなされていた。しかしながら日中戦争の戦線拡大に伴う軍事的緊張の中で、1930年代にはいり国民政府との関係を強化する。また晏は人民解放戦争(1945—49年)当時、アメリカの対華援助法案策定における立役者となった²⁾。さらに人民中国建国後、晏は中国を去り、1952年以降はフィリピンにおいて、マグサイサイ、マルコスといった政権の協力下で、フィリピン郷村建設運動に参加している³⁾。そして定県実験をモデルにした実践を推進し、中国で果たせなかった理念を実現しようと尽力して、今に至っている⁴⁾。

一般に人民中国下においては、晏陽初及び平教会に対しては、上記のような歴史的経緯もあり、現在に至るまでかなり厳しい評価が与えられてきた。つまり晏は“アメリカ帝国主義と中国売弁階級との教育界での代理人”とされ⁵⁾、また平教会の理論は、“売弁的ファシストの教育理論”と断罪されている⁶⁾。従来批判は主に、①国民党の路線に協力した点、②アメリカの対中国政策の尖兵としての役割を果たした点、この二点に集中していた。けれどもそれらの非難に留まり、晏及び平教会の諸活動に対する実証的な研究は、例え評価するにせよ、批判的に検討するにせよ、十分な蓄積がなされて来なかつ

たと考えられる⁷⁾。

一方、平教会は、五四運動以来教育界を席捲していた、教育における平民主義実現を企図する平民主義教育の影響を強く受けていたものと思われる。従って定県実験は、中国における平民主義教育の発展と挫折の歴史の文脈において考察されねばならず、この点に当該実践の意義と限界とが認められよう。中国では1920年代後半になると平民主義の教育思想がしだいに国家主義教育思想へと、とって代わられていく過程がある。定県実験においても30年代前半、急速に国家主義への傾斜を強めていく。そして以後、却って国民政府との関係を強化し、民間教育運動としての活力を失なうのであった。それでは定県実験が、30年代に入り急旋回を遂げるのはなぜだったのか。そこにはいかなる要因が介在していたのか。本稿ではこの問題を考察するため、まず第一章で平教会の活動が平民教育運動から郷村教育運動へと展開していく過程を概観する。続いて第二章において具体的に定県実験の諸側面を検討していきたい。

II. 平教会と郷村教育運動

A. 平民主義と平教会

平教会の教育実践には晏以外にも多数の知識人が参加しており、決して彼だけに平教会が代表されるわけではない。しかし晏は一貫して平教会の指導的立場にあった。従って本章では晏の歩みを見据えつつ、平教会による教育運動の展開過程を考察していこう。

晏陽初は1894年、四川省巴中県に生まれた。家庭は士大夫階級で、父親が開明的であったため⁸⁾、9才よりイギリス人宣教師の下で教育を受けた⁹⁾。このとき以来、彼は敬虔なキリスト教徒になった。さらに1912年香港に行き、セントポール学院での勉学を経て、1916年アメリカのエール大学に留学し、政治経済学を専攻した。1918年同大学卒業後フランスに渡り¹⁰⁾、第一次世界大戦中、連合国側で塹壕掘り等に從事していた中国人労働者（苦力）のための識字教育を実施している¹¹⁾。これは平教会の前史となる活動と考えられよう。

1920年、晏は帰国後、上海YMCA平民教育科主任となり、国内での平民教育事業に着手している¹²⁾。当時、五四運動の高揚の中で欧米の新思想が続々と中国に流入し、平民主義が一世を風靡していた¹³⁾。特に五四運動の最中に訪華し、以後二年間中国に滞在したデューイの全国各地での講演活動は、教育における平等を推進する原動力になると同時に¹⁴⁾、「教育による社会の改造」というプラグマティズムの理念が教育界に新しい息吹を呼び

こんでいく¹⁵⁾。そして教育における平等、つまり教育の機会均等を模索するなかで、従来無知の世界に閉じ込められてきた平民に対して、識字を中心とする基礎的教育を施すための平民学校が、雨後の筍のように全国各地に創設されていった。

これらの諸活動をまず調査した上で、晏は1922年に長沙で¹⁶⁾、また1923年2月から7月にかけて山東省煙台及び浙江省嘉興において、各地のYMCA等の協力を得て、組織的な識字教育を実施し、平民学校を設置してかなりの成果をあげた¹⁷⁾。

1923年になると各地で分散的に展開されていた平民教育運動が、当時の国共合作という民族統一戦線成立の熱気の中で、全国組織結成という形で統合されてくる¹⁸⁾。そして前国務総理、熊希齡の夫人であり、社会事業家であった朱其慧や陶行知を中心に、連携の動きが活発化する¹⁹⁾。こうして同年8月26日、平教会総会が正式に発足し、晏は総幹事として選出された。しかしYMCAは晏が活動の第一線を退くのを望まず、彼の正式な総幹事就任は、一年後の1924年8月となった²⁰⁾。また平教会総会成立と前後して、江蘇・吉林等全国20省で平教会支部が組織されている²¹⁾。総会は各地域との連絡をとりながらの普及活動を中心としていた。

こうして平教会は平民主義の高揚の中で創設されたが、これは第一次世界大戦後の全世界的な民主化の波に対応するとも言えよう。そして平教会の活動家たちは、“平教会の「平」の字は、「平権 (equality)」、「平和 (peace)」、「平明 (plainness)」の意味を含んでいると考えていた²²⁾。特にその初期の活動においては「平権」が強調され、“階級的貴族制度を打破し、平等な全民的教育制度を創設し、新民を養成すること”が平教会の目的とされた²³⁾。また晏陽初は平民教育運動を説明する中で、その性格として、①独立性 (政治・宗教からの独立)、②奉仕性、③地方自営性、④公平性、⑤民主性、をあげている²⁴⁾。以上は平教会の諸実践の根底に存在していた精神と考えられ、それら原理として平教会は発展していくのであった。

B. 平民教育運動から郷村教育運動へ

晏陽初は1924年に総会に就職後、都市での識字教育を中心とする平民教育活動に携わったが、当時平教会は固定した資金源も無かった。しかし晏は、1925年7月、ホノルルで開催された太平洋国民会議に出席した際、同地在住の華僑より2万ドルの寄附金獲得に成功している²⁵⁾。平教会は以降、この豊富な財政的基盤をもとに工作を拡大していく。そして職員も、1925年末には6人であった

が、1年後に42人へと増員されている²⁶⁾。

ところで1925年秋、晏が帰国した頃の平民教育運動は1920年代前半のような勢いを失っていた。五四運動以来の都市民衆運動の広汎な展開は、同年発生した5.30事件での盛り上がりをも最後にこの頃より沈滞に向かう。そして1927年の上海クーデター、28年の国民党による全国統一という状況下で、民主勢力の統一は崩壊へと進むのである。そして分裂と混沌の時代を迎えて、知識人は民衆との新たな関係構築を模索し始めた。この過程で、1923年以降破産的状况に追い込まれていた農村の問題は、緊迫した課題として捉えられるに至った。

そして多様な形態での郷村工作が活発化していくが、この中には例えば、梁漱溟を中心とする郷村建設運動があげられよう。これは清末以来の「村治」の系譜をひくものと考えられる²⁷⁾。そして政治 (行政制度の改革)、経済 (農業技術の改良)、文化 (学校の創設) 等から総合的に郷村の再建を企図し、民族再造を目標とする運動であった。梁は哲学者として著名な人物であるが、1929年河南村治学院にて、1931年からは山東省鄒平の郷村建設研究院を本拠地として、郷村建設の理論と実践とを発展させていく²⁸⁾。

さらに、この郷村建設運動とは別系統で、1928年の国民革命の挫折後、土地改革を基盤とした共産党による根拠地建設運動が広がり、1928年来、農村においてソビエト政権が樹立されるに至る。

こうして1920年代後半、全国各地では異なる思想的系列に属する各種の組織により、農村工作が推進されていく。そしてこれらの動向と連関しながら、この時期、郷村教育運動が勢いを得る。従来、学校は都市部に集中してただけでなく、農村の学校自体、学習内容・組織形態など都市型の教育を踏襲したものだ²⁹⁾。従って農村の問題を解決できないのみならず、農村人口の都市流入を惹起し、却って農村崩壊を促進していた³⁰⁾。こうした状況への問い直しから、郷村教育運動が各地で生まれ、その一方で都市での平民学校設置を中心とする平民教育運動は停滞していくのだった³¹⁾。

平教会ではすでに1924年に郷村教育部が成立していたが、同年冬以来、直隸省 (現在の河北省) 保定地区、京兆区 (北京を中心とする地区) 等の農村部で、平民学校建設にあたっている³²⁾。

一方、民主統一戦線の崩壊という事態の中でかつて全国の平民教育運動を統合する過程で生まれた平教会も、分裂の兆が見えてくる。そして陶行知と晏は、すでに1925年秋頃、歩むべき道を違えていた³³⁾。これは晏のアメリカ帰国直後に当たっている。そしてアメリカの援助

に依存し平教会の工作を大規模に拡大しようとしていた晏に対して、より中国の平民に近づき、民衆への認識を深めようとしていた陶との間には亀裂が生じていく。こうした中で、1927年陶が南京近郊に曉荘師範を開校した一方、晏を中心とする平教会は26年秋に定県を集中的実験活動の拠点として選出する。また平教会では従来、普及活動を重視していたが、これを契機に方向転換し、調査研究活動への本格的着手を開始した。この背景として1924年来の郷村教育部の活動が暗礁に乗り上げていたことがあげられよう。晏は元来、都市より農村の方が識字教育活動が運動化する条件があると考えていた³⁴⁾。しかし実際はその逆で農民は識字の必要性が理解できず、さらに生計の窮乏化が著しく学習の余裕も無かった³⁵⁾。また“平校卒業生10人中9人は手紙も書けない”という質的方面での不十分さもあり³⁶⁾、平教会の活動全体が壁に突き当たっていた。こうして以後十年にわたる定県実験がその歩みを開始するのであった。

Ⅲ. 定県における郷村教育運動

A. 定県実験の理論的基礎

定県における平教会の実践は一般に「定県実験」と呼称される。これは平教会の郷村教育の理論的基礎が、実験主義の思想にあることを意味している。実験主義は、デューイのプラグマティズムの線上に、胡適が展開した理論である。胡適は1919年のデューイ来華に際して通訳として全国各地をまわり、プラグマティズムの普及に努めた。そして「実験的方法」こそはプラグマティズムの本質をなすものと考え、プラグマティズムが従来「実用主義」と訳されて来たのに対して、新たに「実験主義」という訳語を生み出した³⁷⁾。さらに実験的方法を①事実、②仮説、③実験の三段階に集約している。また胡適は排除すべき五大仇敵として、“貧乏、疾病、無知、汚職、騒乱”を列挙しているが、これらを打倒する“真の革命”は、“世界の科学知識と方法を十分に採用して、一步一步自覚的に改革を進めること”としている³⁸⁾。

そして、胡適は平教会の成立にあたって参加しており³⁹⁾、胡適を介して紹介された実験主義が平教会理論の骨格になっていると考えられる。例えば1932年頃から、平教会は人民の生活における克服されるべき四つの欠点として、「愚、窮、弱、私」をあげているが、これは五大仇敵をモデルにしていると思われる。そして四つの欠点各々に対して四大教育を平教会では提唱し、文芸教育によって「愚」を、生計教育によって「窮」を、衛生教育によって「弱」を、公民教育によって「私」を克服

し、中国人の一人一人が知識力、生産力、強健力、団結力に富んだ「新民」になることを目的としていた。また定県実験は、①社会調査の実施、②調査事実に基づき四大教育の研究をした上での実施計画立案、③三大教育方式による実施、④実験成果の制度化と普及、という段階が踏まえられていた⁴⁰⁾。これは胡適の事実—仮説—実験という図式を実践化したものと考えられる⁴¹⁾。

晏陽初の言葉を借りれば、“自然科学は実験するから進歩するのであり、定県実験はこれを目指したもの”となる⁴²⁾。さらに晏は、“デューイのようにただ子どもを人為的環境に置くだけの実験”でなく、“総体としての実際生活を単位とし、全県の政治・経済・社会を研究の対象とすること”を追求した。そしてこの方法こそ“定県が独創し、中国のみならず欧米にもかつて存在しなかった”としている。そしてこの定県実験の成果を全国1900県へ普及するという壮大な意図のもとに定県実験は推進されるのであった。

B. 定県実験の展開過程

定県是北京から南へ200km程の位置にある。県東部の翟城村では光緒28年(1904年)以来、地方名士で「村治」の流れをくむ米鑑三が郷村改良事業に着手し、開墾や教育事業に専念していた。また米鑑三の子、米迪剛も日本留学後郷村教育に尽力し、定県の名は全国的になった⁴³⁾。平教会は1926年、定県を集中的実験区に選定したが、その理由としては、①華北の典型的農村であること、②北京に近く実験結果の全国的普及が容易なこと、③地方名士の協力を得やすいこと、等があった⁴⁴⁾。1926年の定県入りから、1937年の日中戦争拡大による平教会の定県引き上げまでの11年間は次のように時期区分できる。それは、①平教会の定県入りに始まる「準備期」(1926年10月～1930年9月)、②平教会が本部を北京から定県へと移行させ、文字教育のみならず経済面でも諸施策を実施する「実験期」(1930年10月～1933年4月)、③定県実験が省政府機関と平教会との合作事業となり、国家主義的色彩を帯びた「県政改革期」(1933年5月～1937年7月)の三期である。以下三期に分けて考察していこう。

1. 準備期(1926年10月～1930年9月)

この時期、“除文盲、作新民”をスローガンとして平民学校が組織され、識字教育を中心とした活動が展開された⁴⁵⁾。これは都市平民教育運動の実践を継承するもので、識字教科書も都市向けのものがそのまま使用される状況であった。また平民学校は主に小学校に附設され、教師も小学教師の兼任であった。対象は12才以上で中学校に行けない青年、あるいは成年で文盲の者とした。授

業は1日2時間で1課の学習をし、4か月で識字教科書4冊全96課、1300字程度の学習を目標としている⁴⁶⁾。しかしながら誰が文盲か、またどこに平民学校を設置すべきかもわからなかったため、調査から着手することになった。そして1928年来、社会学者李景漢を中心に大規模な調査が実施され、それは農村経済から生活風俗、教育等にまで及んでいる。李など平教会スタッフは積極的に農民の中へ入ろうとしたが、農民は彼らが同地に飲食起居していることを理解できず、またスタッフも農村の生活に慣れず困難を極めた⁴⁷⁾。けれども米迪鑑ら地方名士の協力で、工作は漸次順調に進展していく。このときの調査結果はのちに『定県社会概況調査』(1933年)に結実する。これは解放前の華北の農村を理解する上で真憑性も高く貴重な資料であり、当時から高く評価されていた⁴⁸⁾。この時期平教会は概して財政・人材とも不足していた。しかしそのため学校経営等に関しても却って地方人士や村民の協力を積極的に求め、彼らの自発性を喚起しようとしている。例えば地域で比較的学識のある者を動員し、彼らの家に「問字所」を設け随時、文字を尋ねに行けるように試みた⁴⁹⁾。こうして窮乏化している農村の実際から出発し、農民の生活に合致した教育制度を創造しようとしていたのである。また地方知識人の協力があって初めて平教会活動も軌道に乗ったことは看過できない。

2. 実験期(1930年10月～1933年4月)

a. 定県実験の拡大

この時期、平教会本部を定県に遷して、郷村教育工作が大規模に実施されることになった。この実践の財政基盤となったのは、アメリカからの資金援助であった。定県実験の経済的基礎を準備したのが、アメリカからの寄付金であったという事実は、定県実験を当時のアメリカの対中国政策の一貫の中で捉える必要があることを意味する。晏は1928年から29年にかけて9か月滞米したが、“驚異的な寄附集めの名人⁵⁰⁾”であった彼は、50万ドルという巨額の寄附を集めている⁵¹⁾。そして29年5月、晏の帰国後、平教会の本部を定県に移して活動を定県に集中すること、幹部とその家族は一年以内に定県県城へ転居することが決定される。定県への移転に伴う困難は多く、農村での生活に職員や家族が耐えられず、“当初60人のスタッフが40人に激減”した程であった⁵²⁾。

その一方で実験の規模は拡大化し、四大教育三大教育方式が提唱される。そして単なる文字教育にとどまらず工作の範囲を広げていったのは、当時活発化していた郷村建設運動の影響を受けてのことと考えられる。また教育による社会の改造は生活の諸側面に及ぶべきである、

という理念がその底流にある。この三大教育方式は学校式(平民学校)、社会式(図書館、展覧会、講演会等)、家庭式(家庭会)から成るが⁵³⁾、学校式教育が最も重要な柱とされていた。平民学校には普通平校の他、実験平校(平教会経営で教材等について科学的実験を実施する)や、表演平校(平教会によって模範校として公認された学校)が設置された。そして、実験平校では本部職員が教鞭をとったが、ここでの研究成果をまず表演平校へ、それから普通平校へ普及するといった中央集権制が企図された⁵⁴⁾。

この時期、1930年には「10年計画」が、1932年にはそれを修正して「6年計画」が出されている。しかし計画の規定は煩雑であり、計画倒れに終わっている⁵⁵⁾。

以下では研究・実験の内容を四大教育の分野に分けて考察したい。

b. 四大教育を中心とする研究・実験

文芸教育の分野では基本字表(1320字)の制定など文字研究工作の他、「平民千字課」(初級)、「市民千字課」(上級)、「農民千字課」等の教科書が編集・出版されている。これらの千字課本は基本字表に依拠して編集され、4冊から構成されている。内容には農業常識、自然科学常識、あるいは「選挙」などの政治常識も盛り込まれ、科学性・啓蒙性によって特徴づけられよう。しかし教科書が全国を対象にしていたため、地理常識にしても上海・北京の項はあるが定県は無いというように一般的な内容で⁵⁶⁾、農民にとっては学習の糸口を掴みにくいものと考えられる。また新字密度(100字ごとの新出漢字数)が他の教科書に比して高いという報告もあり⁵⁷⁾、農民にとって平易ではなかったことが想像される。

生計教育では農事改良の研究(綿花・小麦の施肥、虫害防止、豚の品種改良)等がなされている⁵⁸⁾。そして波支豚(Poland-China種)を外産から購入し、定県豚と交配させ、産肉量の多い豚を作るのに成功した、とされている⁵⁹⁾。定県実験ではこうした近代科学の成果を農村へと導入し、従来の伝統的な立ち遅れた農業の近代化を目指している。そしてこの結果をまず生産意欲のある上層自作農に普及するため、1930年にはモデル農家巡回訓練学校が試験的に組織された。そして平民学校卒業生で農事改良に意欲のある成人・青年を対象に作物選種・新品種等の訓練と普及を行なった。モデル農家巡回訓練学校の卒業生から成績優秀者を選びモデル農家とし、農事改良の成果を一般農家へ提示・伝達することが期待されている⁶⁰⁾。しかしながら新しい技術は農民の大部分を占める農民下層部にとって受け入れがたいものだった。例えば前述の“産肉量の高い豚”は、良好な条件下で養育

の高い大豆等の飼料を与えてのことだった⁶¹⁾。けれども貧農には豚に与える飼料さえなかった。つまり新しい技術導入は一定の資金を必要としたが、多数の貧困に喘ぐ農民はその資金さえ用意できなかったのである。こうした状況下での農事改良は却って、農村部での階級格差拡大を生じさせる危険性をも内包していた。

衛生教育制度の研究は、アメリカのロックフェラー基金やミルバンク記念基金からの援助を特別に受け推進された⁶²⁾。そして保健員（各村一名）、保健所（定県8区に各区一所）、保健院（県域内に一所）という三層構造の衛生網が県内に布置された。保健員は平民学校卒業生の会である同学会から選出される。そして冬期に10日間の訓練を毎日4時間受講して養成される⁶³⁾。保健員の活動は全くの奉仕であったが、その担当する衛生事業としては①衛生常識の宣伝、②救急治療、③井戸の改良、④種痘工作等があげられよう。保健所では治療の他、保健員への指導・援助を行ない、保健院では医療の研究も実施している。この他産児制限、衛生展覧会の開催もなされ、予防活動にも重点が置かれていたことは注目できる。また当時から定県の衛生事業に対しては国内外で高い評価を与えられていた⁶⁴⁾。しかしながら平教会の衛生事業は、蚤や蚊の駆除法にしる経費を必要とするものであったが、衣服を長く保たせるため洗濯さえ惜しむ農民にとっては、単なる理想論と捉えられることもあったのである⁶⁵⁾。

公民教育については、国民の精神発揚のため史上著名な志士・英雄の事蹟を選択し、これを図説にしたり公民教育の材料とする工作がなされた。例えば識字教科書には林則徐、岳飛等、外国からの侵略軍に対して勇敢に闘った人物が紹介されてある。しかし公民教育は他の三大教育に比してあまり精力が費されていない⁶⁶⁾。これは定県実験において30年代初頭まで「科学」が重視され、精神主義的傾向が稀薄であったことを意味している。

つまり一般に中国では1920年代初頭に台頭した平民主義教育は、すでに20年代後半には国家主義教育に変質させられる⁶⁷⁾。そして国民党による全国統一と国共対立の中で、国民政府に忠誠を尽くす人間を形成することを目的とする「党化」の教育が全土を覆っていく。これに対して平教会はアメリカ帰国留学生を中心とし、西洋近代主義思想の強い影響を受ける中で自己形成した知識人が多数参加したため、その実践も開明的であった。また定県実験は実験主義を基調とし、科学的合理的な実験内容を重視しており国家主義的な色彩は顕著では無かった。そして1931年、蒋介石によって派遣された中央軍校の定県視察団は、定県実験は多くの点で賛成できるとしなが

らも、“党化教育が欠落し、また教育の中立を主張するのはおかしい”と不満の意を表明していた⁶⁸⁾。これは“反共主義的实践を行なった定県⁶⁹⁾”という人民中国下での評価は再考の余地があることを示している。

また晏は、“宗教教育を公民教育の代わりに行なっても別に支障はない”と考えており⁷⁰⁾、晏のキリスト教徒としての精神が、党化教育政策に対して一定の防波堤となっていたと考えられよう。

3. 県政改革期（1933年5月～1937年7月）

a. 国民政府の諸政策と平教会

1933年5月、河北省県政建設研究院が創設され、以後、定県実験は省政府機関である研究院と、平教会との合同事業となる。そして定県実験は以降、国家主義的色彩を濃厚にしていくが、この背景としてまず国民政府の諸政策との関連を理解する必要がある。

1928年に全国統一を成し遂げた国民政府はその成立基盤が浙江財閥にあったため、元来工業化に重点を注いでいた。しかしながら1930年代にはいり、世界恐慌と自然災害との影響を受け、農作物が入超に陥る他、華北では日常生活に最低必要な経費をも保障し得ない貧窮家庭が80%を占めるに至った⁷¹⁾。こうした農村部の構造的危機が階級対立を激化させるのを防止するため、政府は「農会法」「土地法」（1930年）の制定に見られるように、農業政策に本格的に取り組み始める⁷²⁾。事実、共産党は、農村の破産的状況を背景としつつ、ソビエト政権を1931年江西省瑞金に樹立し、国民政府による全国統一を阻止していた。さらに蒋介石は、当時分立していた郷村教育・郷村建設の運動を自己の掌中に収めるため、各組織の指導者と個人的に会見を始める。その中でも特に晏陽初は、1931年3月の蒋介石・宋美齡との謁見後、国民政府との関係を強化していった⁷³⁾。

さらに1932年になると第二次内政会議が開催され、県政改革案が通過し翌年「省立県政建設実験区弁法」として発令されている。この法案は内政部次長甘乃光が定県を訪問した際に起草されたものだった。内容は主に①各省は県政建設研究院を設立する、②人材・経費が困難な現在の国難にあたり、各省は県政建設実験区を設置し、県政府と協力して工作を集中する、の二項から成る⁷⁴⁾。これはソビエト区に対抗する県実験区の設立を企図するものとも考えられる⁷⁵⁾。河北省では1933年5月、熱河陥落の直後に河北省県政建設研究院を設立し、晏が初代院長に就任した他、定県を実験区と指定している。研究院は河北省政府に直屬し、平教会と研究院とは法律上無関係である。しかし実際の事業面では密接な連携を保っており、平教会が研究面を、研究院が実践面を担当してい

た⁷⁶⁾。

こうした過程において、平教会が20年代に顕示していた「教育の独立」という基本的な姿勢は変貌するに至る。晏陽初は20年代に“平教運動は完全に大衆の自発的運動であって、いかなる他方面の支配や指揮も受けない”としていた⁷⁷⁾。しかしながらこの段階に至って“研究の成果をひろげていこうとする場合には政府の力を借りる必要がある。つまり学術と研究とを打って一丸となす。これこそ政治の学術化、学術の実験化である”としている⁷⁸⁾。

こうした変容の背景には1931年満州事変勃発、33年日本軍の熱河・華北への侵入、35年チャハル侵入という日中戦争の戦線拡大があり、定県が河北省という地理的条件からも緊張が高まったことが考えられる。また1930年代に入り晏は、定県実験がすでに実験の段階を終え、全国的普及の時期に至っているとした⁷⁹⁾。ここには、国家存亡の危機という緊迫した事態に直面して一刻も早く定県実験方式を全国に押し広めることで乗り切ろうとした、晏のあせりが見い出せよう。こうした焦燥の中で晏は国民政府との接触を保つことで国家存亡の危機を救う方向を選びとっていくのであった。

そしてこの頃、7年間の定県実験の成果を全国に普及することが企図され、そのため他団体指導者の人材訓練や、平教会スタッフの他地域への人材派遣が重視されている。また晏自身、戦線拡大を続ける華北の状況を見据えながら、1935年来、湖南省政府や四川省政府など大後方との連携を深め、そこでの郷村建設活動に多忙であった⁸⁰⁾。こうして晏は1936年河北省県政建設研究院の院長を辞任しており⁸¹⁾、定県実験は平教会の事業の中で次第に比重を軽くしていた。

一方、30年代前半にピークを迎えた郷村建設・郷村教育運動は1937年の日中戦争激化の中で、多くの団体が戦乱のため実験区を逃れ⁸²⁾、あるいは財政・人材上の困難で急速に停滞していく。この中で平教会は1937年7月定県を放棄した後も、国民政府の置かれる四川省を中心として、政府の強力な支持の下に定県モデルの郷村教育事業を営んでいた稀な例である⁸³⁾。しかしながら国民政府が進めていた新生活運動(34年)や国民経済運動(35年)にすでに包絡され、その活動は、自衛工作や経済建設、県政改革を中心とするものとなっていく⁸⁴⁾。こうして民間教育運動としての独自性と活力とを失ない、郷村教育運動の担い手としての歴史的使命を終えていくのであった。

b. 定県実験の軍事化

この時期、「実験期」からの継続的研究が実施された。

そして衛生制度も拡充され、また農事改良も推進されている。しかしながら同時に、「内憂外患」を背景に定県実験は軍事的色彩を顕わにしていく。特に1935年、県内組織機構が整備され、最も基本的で大衆網羅的な組織として公民服務団が試行的に設立された。これは保甲を単位とし、軍隊規律をその精神とする一種の軍事的民衆組織であった。そして全員参加を原則として団員は現役(16才～35才)、予備(16才未満)、後備(36才以上)と分けられ、随時、各種の農村建設に関する諸事業の訓練や、自衛訓練を受ける義務があった⁸⁵⁾。さらに小学校または平校の卒業生で指導者たり得る者を対象として、公民服務訓練班が組織され、団の指導者養成が企てられた。そして従来の定県実験に見られた「科学的精神」はこの頃より「精神主義」への傾斜を強め、例えば農村建設指導員の訓練においても、人格修養といった精神訓練が取りあげられている⁸⁶⁾。

またこうした動向は、教育に関しても必然的に影響を及ぼすに至る。当時軍事情勢の緊迫化に伴い村財政が逼迫し、教師も不足していた。従って平教会では数十村を選定し、「組織教育」の制度を試験的に導入している。「組織教育」とは、“大隊制に基き民衆を組織し、導生教学を運用して総合活動を完成した上で農村建設を実現する、一種の新しい教育方法”である⁸⁷⁾。

まず小学校と平民学校とが合体統合され、一村に一校の学校が設置される。そして、学生を8～12人の1小隊に組織し、4小隊で1中隊、2中隊で1大隊とし1大隊ほぼ100人程度を一つの単位とする⁸⁸⁾。そして教学は導生制を利用し、教師が大隊長に教授した後、大隊長→中隊長→小隊長→隊員という方式で、各隊長それぞれが導生(チューター)となり教授にあたった。まだ単なる読書だけの教育に留まらず、“生活を唯一の手本”として経常的に。戸口調査、選挙、防疫等の総合活動が実施された⁸⁹⁾。この組織教育は「動」を重視し、「総合活動制・導生制・大隊制」が各々、「動・自動・群動」の三大原則に対応するものと考えられていた⁹⁰⁾。

しかし大隊制は学校に軍隊式の位階制を持ち込んだもので、個人の能動性を必ずしも基盤としていない。また導生制は陶行知の実践で知られる小先生制に通じるものがある。しかしながら常識から算術まで経験の足りない導生が教授し、これは導生に過重な負担をかけるばかりでなく、一般隊員はほとんど教師の指導を受けず、彼らへの教育も十分に保障できない、という欠陥を持っていた。総合活動制は1920年以来、中国に導入されたキルパトリックのプロジェクト・メソッド(設計教学法)を強く意識して実施されている。しかし総合活動制でなされ

た活動は、戸口調査・種痘という行政の手足としての活動に他ならず⁹¹⁾、生徒の興味・関心を考慮に入れていない。こうして組織教育はいろいろな教育理論や実践を、便宜主義的に導入し折衷しているのが理解される。

この時期の教育活動は、軍事的色彩が濃厚で、教育としての実質に乏しい。しかし導生制については、興味ある実践が展開されているので、次に紹介してみよう。

c. 導生制

平教会では1931年以来、家庭・職場等を単位として導生制の実験を行なっている。1934年以降は21村の学校で大隊制において導生制が実施されるのみならず、保甲組織を利用し伝習所が設立された。この伝習所では学校に行く暇のない失学児童や文盲の青年・成人を対象とし、導生には小学校高学年の児童または平民学校卒の識字者が当たり、教育が実施されている。授業は主に昼食後の休憩時間一時間程度を充当した⁹²⁾。

導生制の原型は、1920年代初頭に南京の平民教育運動で採用された“連環教学法”に求められる⁹³⁾。これは家族の中の識字者が教師となり、文盲に対して教授するものであった。これが基礎になり、1932年に創設された陶行知の上海工学団における小先生制が生まれ、定県では1931年来の導生制の実験へと結実している。導生制は小先生制に類似する点が多いが、これは前者が後者に触発され発展した経緯によるのであろう。しかしながら小先生制は、小先生の成長を重視していたが、導生制にはその観点が稀薄である。そして陶の「教・学・作」に対して平教会は「伝・習・用」という概念を提起しているが⁹⁴⁾、小先生制の理念の真髄は失なわれ、この導生制が結局、経済的軍事的状況緊迫化に対応する便宜的なものであったことを示している。しかしながら導生制が大衆の間に用いられたとき、導生達はその制度を活用し豊かな教育実践を創造している。

例えば東建陽村の総連合伝習所（村の全伝習所の調整機関）では、若い青年が導生となったが、彼らの意欲は高く、チョーク・教材など自主製作する他⁹⁵⁾、自主編成の教科書も出版している。内容は第一課「手」、第二課「人」、第三課「盆」、第四課「犬」など、生活に根ざした感覚から生み出されたものである。具体的な教学においては、まず「ご飯を食べるとき、何を使うか？」と質問し、「手」という解答を得た後、第一課の学習を開始している。当時、平教会の「千字課」も含め普通の識字用教科書の第一課は「人」であった。従って平教会では第一課が「手」で始まっているのを“奇怪”としている⁹⁶⁾。しかし導生の自主編成の教科書の方が明らかに生活現実に依拠しつつ、生活を再認識する中で生み出され

ており、これは導生制が創造した貴重な実践と言えよう。

さらにこの総連合伝習所では民衆用刊行物の発行を行なっている。この中には導生によって作られた以下のような詩が掲載されている⁹⁷⁾。

<導生の歌> 李豊年

自らの力で、厳しい戦闘を闘いぬき
自分でつくった飯を食べ、
自分の行動は自分で責任を負う。
直ちに伝え、直ちに学習し、直ちに應用する。
こうして初めて一人前の人間になれる。

<陶行知は半分しか言っていない> 李振江

陶行知は死書を読む学生を罵って言った。
死書を読めば、死んだ読書をする事になり、読書は無意味なものになる、と。
私は死書を教える教師がいなければ死書を読む学生もいなくなると考える。
つまり陶行知は半分だけしか言っていない。
だからもう半分のことを私は言う。
死書を教えれば、教えたことも役に立たず、教育は減らしてしまうだろう、と。

ここには導生であることの強い責任感と激しい熱意が湧れており、それは平教会の定県実験に対する批判ともなり得るような厳しきで迫ってくる。こうして民衆は平教会の意図を超え、自己のあり方を捉え直すことで自身を大きく成長させていくのであった。

C. 定県実験の意義と限界

前節では定県実験について検討し、それが実験主義から出発しつつも、次第に国家主義的傾向を強化していった過程を追ってきた。本節では、定県実験が持つ意味を考えながら、その限界について明らかにしていきたい。

定県実験に貫ぬかれている信条は定県主義と言われている。定県主義とは、“定県を実験室として住民を参考書としながら、基礎的、实际的、普遍的かつ経済的な制度・方法・内容のモデルを創造し、それを全国に普及すること”であり、この壮大な企図の下に定県実験は着手された⁹⁸⁾。そして平教会は農村の近代化という問題に今から半世紀も前に尽力し、系統的・組織的な研究や教育活動を実施しており、その意義は以下の四点に概括できよう。

第一には研究が重視されている点である。そしてアメリカ帰国留学生を中心として、秀れた調査・研究事業が

実施され、この点、他の郷村工作諸団体の追従を許さない。例えば李景漢による調査活動が、『定県社会概況調査』に結実していることは前述の通りであるが、この他にも、『定県賦税調査報告書』『定県農村工業調査』等の調査が多数出版されている⁹⁹⁾。また、秧歌（田植え歌に起源をもち、西北部を中心とする農村に広く浸透していた伝統芸能）を掘り起こし、活字化に努めて『定県秧歌選』も出版している¹⁰⁰⁾。あるいは平教会には1932年以来、教育心理研究委員会が設置され、清華大学の心理学教授などが参加していた。そして1927年から34年の7年間に平民学校を卒業した学生は十数万を下らないといわれるが、そのうち36,179人に対して、委員会は知能テストや成績テストを実施し¹⁰¹⁾、これらテストの結果をもとに教学計画が定められている。その他演劇研究委員会が設置され、卓越した戯曲作家であり演出家であった熊佛西らが参加した¹⁰²⁾。そして農民が自力で整備した露天劇場において、農民自身が演技者となって農村の問題をテーマとする、文字通りの農民演劇が上演され、大きな反響を呼んだ¹⁰⁴⁾。こうした研究の精神は定県実験に貫かれていると考えられる。

第二に、農民を科学化することが企図されている点である。定県実験では“科学とは本来普遍的で平民的なもの”であり、“一般民衆が相当な科学的知識を持つことが重要”とされた¹⁰⁵⁾。そして妥当性はともかくとして、農事改良の実験の成果を、一般農家へ普及するよう試みられている。また「水」「日食」「雷」といった自然に関する常識が、識字教科書の中に多く盛り込まれている。そしてのちに「県政改革期」にはいり、精神主義的傾向は強まっていくが、その中でも依然として“農民の科学化が現在の国家危急のときに必要”とされていたのである¹⁰⁷⁾。

第三に、定県実験が民間団体である平教会によって推進されている点である。従って政府から独立してなされ、前述のように、「党化教育」が欠けていると軍の関係者から批難されることもあった。そして「県政改革期」に入り、次第に政府に接近し独自性を失っていくが、けれども要は、“平教会の工作は学術的立場に立脚し、超然たる位置にあり、政治には深入りしない”と主張している¹⁰⁸⁾。

第四は、定県実験が他の郷村教育団体及び全国に与えた影響の大きさである。例えば識字教科書などは、全国的に平教会によって編集されたものが広く使用されていた¹⁰⁹⁾。また『農民週刊』などの雑誌も発行され、全国を対象として販売されていた¹¹⁰⁾。また衛生方面では、陳志潜（ハーバード大学出身、内政部衛生署元技術員）らに

よって着実な努力が積み重ねられ、“衛生に関しては定県の制度を採用すべきである”と郷村工作諸団体から称賛され¹¹¹⁾、深漱溟による山東省での実践等¹¹²⁾、全国各地で採用されている¹¹³⁾。

以上検討してきたように定県実験の果たした役割は大きく、決して過少評価できない。

しかしながら同時に定県実験は多くの矛盾を内包していた。

第一に、定県実験は農民が「近代科学」の成果を実生活に導入することを課題とし、確かに品種改良等の普遍的一般的な実験はなされたかもしれないが、巨額の資金が投入された実験結果は、却って農民の生活現実から乖離するものとなった。例えば前述のように農事改良の結果できた産肉量の高い新品種は、多くの飼料を与えてのもので、農民下層部の現状では効果が期待できないものだった。そして“平教会の長所は科学的精神にある”とされたが¹¹⁴⁾、実情を考慮しない近代科学技術の伝播は、真の科学的態度の欠落を意味すると思われる。そして農民の科学化を目指した定県実験であるが、結局、農民は科学的認識を形成し得なかった。

第二に、大規模な実験を継続的に実施する経済的基盤となる多額の資金や援助を国内外から獲得するため、対外的な宣伝が重視され、日常業務に支障を来す程であった¹¹⁵⁾。また“実際工作より宣伝が盛ん”という批判も当時からあった¹¹⁶⁾。例えば内政部次長の甘乃光が定県を訪問した際には、急拠新しい畜舎を建てる等の準備がされている¹¹⁷⁾。

第三に定県実験では定県という場を借りて平教会が実験を行なう、という発想が強く、定県の将来的発展の基礎となる事業を実施する、という志向が稀薄であった。例えば三大教育方式のうち社会教育の実験として、ある村にラジオが設置されたが、実験の結果、効果が認められたとした後、直ちに当該村に設置されたラジオが撤収されている¹¹⁸⁾。さらに、実際の教育活動では、平民学校における一般大衆を対象とする識字教育と、「農村建設育才院」での大学卒業生を対象とする、全国的な郷村工作の高級人材の訓練工作、とに両極分解している¹¹⁹⁾。そのため定県の指導者を養成するための事業が必ずしも重視されておらず、また成果もあげていない。例えば平民学校以外の学校は、平民職業学校（28年）、青年補習学校（30年）、生計巡回訓練学校（33年）へと次々に改組されているが、これは参加者も少なく軌道に乗らなかったためである¹²⁰⁾。

第四に、あくまでも実験の主体は平教会であり、農民は実験の対象に過ぎなかった¹²¹⁾。従って農民の実情に

合致しない壮大な計画が立案された。こうした状況では農民の潜在的な力を喚起し得ず、知識力・生産力・強健力・団結力も育成されず、計画が挫折するのは明らかであった。

以上四つにわたり定県実験の問題点をみてきた。そしてこれらは実験主義の思想を礎として定県に下放していった平教会が、定県民衆の中に根を下ろすことができなかったことを提示している。そして定県実験では大衆が能動性を発揮することが強調されていたにも拘らず、一連の実験に共通しているのは、知識人による大衆の教化と構造というである。つまり平教会は大衆の知識力・生産力・強健力・団結力の向上を企図し、全面的に発達した人間の形成を指向した。そして確かに識字者が増加するなどの成果をあげたかもしれないが、これらの力量を大衆が自らのものとして統合していくための鍵である自発性の喚起に失敗している。

従って、定県実験を概観すると、平教会は窮極的に、大衆が自己への認識を深め、世界観を確立して立ちあがることを恐れていた、と考えられる。それは土地小作問題を回避している点にも表出している。当時展開されていた共産党による江西省ソビエト区等における根拠地建設運動は、農民が土地革命を通して初めて自らを歴史の主体として認識し、自己を変革していくことを端的に示している。しかしながら定県実験では、農村の根本的問題であった土地小作問題の重要性は認めながらも、“政府が力を発揮して解決すべきこと”として処理してしまった¹²²⁾。それは“農民が革命に向かうことを許さない哲学”に陥り、“せいぜい良い政府を求める程度に留まる”のであった¹²³⁾。これは実験主義の理念に支えられた定県実験の限界とも言えよう。

こうして定県実験は民族再造による国家の危機克服を提唱しながらも、その内包する欠陥のため大衆を發動できなかった。そして権力と結ぶことで大衆を動員する道を選ぶことになり、そのため教育による社会改造を企図しつつ政府と結びつくといった自己撞着に陥っていく。また、一方で満州事変勃発に伴う河北の軍事的緊張と、定県実験を全国普及することへの焦燥の中で、平民主義教育運動として貫かれてきた定県実験は国家主義へと傾き、科学的精神も輝きを失なうに至る。そして“武力にも頼らず、政治的背景にも持たず、ただ政府を援助するだけ”としながらも¹²⁴⁾、結局は政府の政策にからめとられていくのであった。

しかしながら定県の民衆は、導生制における新しい実践の創造に見られるように、平教会の策定した諸制度を逆に自らの武器としていく。そして平教会が1937年に定

県を放棄した後、日中戦争という困難な状況に立ち向かい¹²⁵⁾、日中戦争そしてついには、人民解放戦争の勝利を手中にしていく。この過程で晏陽初は中国現代史の潮流から押し出され、1949年に中国を離れて1952年以来、活動の場をフィリピンに移すことになった。

(指導教官 官坂広作教授)

〔註〕

- 1) 郷村の「郷」は、中国の行政単位の一つで、鎮とともに県の下に位する。そしていくつかの村落をあわせたもののことを言う。
- 2) 劉又辛“晏陽初の真面目”『人民教育』86期, 1957.6, pp. 47-51.
- 3) Yen Y.C. James, *Rural Reconstruction and Development*, 1967.
- 4) 滝川勉“フィリピン農業問題の展開”<滝川勉編『東南アジアの農業農民問題』亜紀書房 1971> pp. 58-89.
- 5) 華東師範大学教育系教科所編『中国現代教育史』華東師範大学出版社 1983.5 p.223.
- 6) 陳元暉『中国現代教育史』人民教育出版社 1979, p.156.
- 7) 平教会の諸活動に関する先行研究としては①大久保荘太郎“近代支那の平民教育運動—「定県華北実験区」を中心として—”『東亞人文学報』Vol. 2, No. 3, 1942.12, pp. 55-102. ②斎藤秋男“中国革命と「実験区」計画”『社会科学年報』専修大学社会科学研究所編 1975.11, 9号, pp. 275-302. 等の業績がある。
- 8) J.P. McEvoy, *JIMMY YEN: China's Teacher Extraordinary Reader's Digest* 1943.
- 9) 吳相湘『晏陽初傳』時報文化出版 1981, p.6.
- 10) 晏陽初“農民抗戰教育運動溯源”1937.11 <晏陽初『農民抗戰与農村建設』平民教育促進会 1938.5> p.27.
- 11) 晏陽初“保衛國家必須教育國民”1938.1 <同上書> p.60.
- 12) 楊廷銓“中国之平民教育”『新教育評論』Vol. 3, No. 7, 1927.1.14.
- 13) 蔣夢麟“和平与教育”『教育雜誌』Vol. 11, No. 1, 1919.1.
- 14) 蔣夢麟“教育与德謨克拉西”『教育雜誌』Vol. 11, No. 9, 1919.9.
- 15) Barry Keenan, *The Dewey Experiment in China*, Harvard University Press 1977.
- 16) 晏陽初“平民教育新運動”『新教育』Vol. 5, No. 5, 1923
- 17) 『定県平民教育・農民運動考察記』pp. 12-14.
- 18) 陶知行“平民教育概論”『中華教育界』Vol.14, No. 4, 1924.10.
- 19) 湯茂如“組織中華平民教育促進会 総会的経過”『新教育評論』Vol. 3, No. 7, 1927.1.14, 湯はコロンビア大学出身。平教会の中心メンバー。
- 20) 湯茂如“平民教育運動的経過”『教育雜誌』Vol.19, No.9, 1927.9.20
- 21) 丁致聘『中国七十年来教育記事』国立編訳館, 1923年~24年の項参照
- 22) 謝扶雅“平の哲学”『民間』Vol. 2, No. 24, 1936.4.25, p.1.
- 23) 湯茂如『定県農民教育(上)』平教会学校式教育部 1932.1, p.36.
- 24) 晏陽初“平民教育運動術”『晨報副刊』60期47号, 1926.9.
- 25) 湯茂如 前掲“平民教育運動的経過”
- 26) 湯茂如 前掲“組織中華平民教育促進会総会的経過”
- 27) 小野川秀美“梁漱溟に於ける郷村建設論の成立”『人文科

- 学』Vol. 2, No. 2, 1948. 3.
- 28) 胡應漢 “梁漱溟先生年譜 初稿” 『梁漱溟朝話・年譜初稿』龍田出版社 1979. 9.
- 29) 甘豫源 『郷村教育』中華書局 1937. 2, p. 20.
- 30) 金嶽軒 『郷村教育及民衆教育』正中書局 1935, p. 4.
- 31) 鄭正興 『我国近代郷村教育思想と運動』正中書局 1974, pp. 71-79.
- 32) Y.C. James Yen, *The Mass Education in China* 1925 6.
- 33) 斎藤秋男 “陶行知・晏陽初と平民教育運動” 『東亜』1984. 4, pp. 40-41.
- 34) Y.C. James Yen “New Citizens For China” *The Xale Review* 1929, pp. 263-276.
- 35) 陳礼江 『民衆教育』上海商務印書館 1935, pp. 317-328.
- 36) 傅葆琛 “民衆識字教科書編輯原則的商榷” 『民衆教育季刊』Vol. 3, No. 2, 1933. 4.
- 37) 溝口貞彦 『中国の教育』日中出版 1978. 5, p. 129.
- 38) 尾上兼英 “学者の政治活動一胡適の場合” <西順蔵他編『講座近代アジア思想史』I 中国編〔1〕弘文堂 1960> p. 313.
- 39) 吳相湘 前掲書 p. 68.
- 40) 李景漢 『定県社会概況調査』中華平民教育促進会 1933, pp. 785-793.
- 41) J.P. McEvoy 前掲
- 42) 晏陽初 前掲 “農民抗戰教育運動溯源” p. 37.
- 43) 李景漢 『定県須知』平教会 1931, p. 21.
- 44) 憑銳 “平教総会興弁郷村平民生計教育之理由方法及現状” 『教育雑誌』Vol. 19, No. 9, 1927. 9. 20, p. 8, 憑銳はユネル大学出身で平教会の中心メンバーの一人である
- 45) 湯茂如 前掲 『定県農民教育(上)』p. 26.
- 46) 周先庚 “平民識字の幾個先決問題” 『民間』Vol. 1, No.13 1934. 11. 10, pp. 7-11.
- 47) 李景漢 “深入民間的一些經驗と感(上)” 『独立評論』No.179 1935, pp. 8-9. “民衆の事実を知るには、まず民衆の信頼を得なければいけないのであり、そのためには“農民と打って一丸となる”必要であった。しかしながら“炕の上は不潔で座るに耐えないし、食事は粗末で飲み込めない。その他種々の不衛生な状態は耐えがたいものだった”と李は記している。
- 48) 梁漱溟 “北游所見紀略” 『村治之理論と実施』村治月刊社, 1930, p. 14, “平教会の社会調査部は、(平教会の中で)最も価値ある活動をしていると思われる”と梁は記している。
- 49) 湯茂如 『定県農民教育(下)』1932. 1, p. 378.
- 50) Pearls S. Buck, *Tell The People Talks with James Yen* 1959, p. 30.
- 51) 毛應章 『定県平民教育考察記』抜提書店 1933, p. 22, このときロックフェラーやフォードらが寄附を出している。また同時に、中国平教運動アメリカ合作委員会が組織されている。
- 52) 晏陽初 “晏陽初博士講演録” 1933. 4<上海広学会『農村建設討論会報告書』1933. 12> pp. 34-45.
- 53) 家庭式教育の実験は1931年より高頭村でなされている。そして家主会、主婦会、少年会、処女会、児童会から構成される家庭会が組織された。家庭会は月1~4回開催され、家庭道徳等についての話し合いがもたれることと決められたが、ほとんど普及せず、地主が中心で貧農は頭数をそろえるだけのものに陥ったという。
- 54) 李旭 “參觀定県教育紀実” 『師大月刊』25期 1936. 2. 30, pp. 320-350.
- 55) 李景漢 前掲書 (1933), pp. 795-827.
- 56) 王沢民 “第五次改正農民千字課後記” 『民間』Vol. 3, No. 23, 1937. 4. 10, p. 1.
- 57) 徐錫齡 『中国的文盲問題』南園書社 1932, pp. 73-84.
- 58) 張世文 “定県猪種改良の実験” 『民間』Vol. 1, No. 20, 1935. 2. 25, pp. 7-12.
- 59) 張世文 “猪年介紹定県猪の実験” 『民間』Vol. 1, No. 19, 1935. 2. 10, p. 19.
- 60) 姚石庵 “農民生計訓練と農業推廣” 『民間』Vol. 2, No. 7 1935. 8. 10, pp. 1-6.
- 61) 濤鳴 “定県見聞雜録” 『独立評論』No. 4, 1932. 6. 12, p. 17
- 62) M. Bullock, *The Rockefeller Foundation in China: Philanthropy, Peking Union Medical College, and public health*, Stanford University 1973, p. 340.
- 63) 周友敏 “定県保健員訓練談” 『民間』Vol. 3, No. 23, 1937 4. 10, p. 10.
- 64) 章元善・許仕廉 『郷村建設実験』第3集 1935, p. 38.
- 65) 燕樹棠 “平教会と定県” 『独立評論』No. 74, 1933. 10. 29, pp. 3-8.
- 66) 『定県平民教育農民運動考察記』p. 164.
- 67) 市川博 “プラグマティズム教育思想導入期の公民教育観” <梅根悟『世界教育史体系4 中国教育史』講談社1975. 11> pp. 319-355.
- 68) 『定県平民教育・農民運動考察記』p. 25.
- 69) 陳元暉 前掲 (1979) p. 156.
- 70) 晏陽初 前掲 “晏陽初博士講演録” p. 34.
- 71) 趙鳳喈 “農村救済の法律問題” 『清華學報』Vol. 9, No. 2, 1934, 4, pp. 357-384.
- 72) 加々美光行 “中国郷村建設運動の本質” 『アジア経済』Vol. 11, No. 1, 1970. 1, p. 27.
- 73) Y.C. James Yen, *Ting Hsien Experiment 1930-1931*, Chinese National Association of the Mass Education Movement 1931, pp. 27-31.
- 74) 晏陽初 “農村建設要談” 1938. 4<晏陽初 前掲書 1938. 5> pp. 93-132.
- 75) 斎藤秋男 前掲 (1975. 11)
- 76) 晏陽初 “中華平民教育促進会定県実験 工作報告” 『郷村建設実験』第2集, 1934, pp. 88-90.
- 77) 晏陽初 前掲 “平民教育運動術”
- 78) 晏陽初 “平民教育促進会工作演進の個階段” 『民間』Vol. 2 No. 12, 1935. 10. 15, pp. 1-4.
- 79) 晏陽初 “農民運動と民族自救” <章, 許前掲書 (1935)> p. 24.
- 80) 『民間』Vol. 2, No. 20, 1936. 2. 25, “通信” など参照, pp. 18-23.
- 81) 『民間』Vol. 3, No. 5, 1936. 7. 10 “通信” pp. 26-28.
- 82) 徐樹人 “我在郷建派の活動と見聞” 『文史資料選輯』山東人民出版社 1982, pp. 50-67.
- 83) 傅葆琛 “到四川後廻顧と前瞻” 『民間』Vol. 4, No. 2, 1937. 5. 25, pp. 8-10.
- 84) 新都県実験県政府編印 『郷村建設服務員訓練教本』1938. 1, この中に新生活運動綱要, あるいは国民経済建設運動綱要などの内容がある。
- 85) 章, 許前掲書 (1935) pp. 225-260.
- 86) 同上書 p. 235.
- 87) 平教会 『定県の実験』1935, p. 29.
- 88) 張含清 “如何指導学生生活” 『民間』Vol. 2, No. 13, 1935. 11. 10, pp. 1-11.
- 89) 河北省県政建設研究院 『定県農村教育建設』1935, p. 178.
- 90) 李景漢 『中国農村問題』商務印書館 1937, p. 99.
- 91) 張含清 “実験中の三個教育法” 『民間』Vol. 1, No. 3, 1934. 6. 10, p. 1-10.
- 92) 河北省県政建設研究院 前掲書 (1935) pp. 180-196.
- 93) 馬宗栄 『識字運動民衆学校経営の理論と實際』商務印書館

- 1937, p.136.
- 94) 殷子固 “教育力量の認識”『民間』Vol. 1, No. 17, 1935. 1.10, pp. 8-11.
- 95) 王慶祥 “成立伝習処連合弁事処”『民間』Vol. 1, No. 20, 1935.2.25, pp. 1-5.
- 96) 羅靖華 “送教育上門”『民間』Vol. 1, No. 6, 1934.7.25, p.15.
- 97) 殷子固 前掲 (1935)
- 98) 晏陽初 前掲 “農民抗戰教育運動溯源”
- 99) 河北省鄉村建設研究院『定県賦税調査報告書』1933, 張世文『定県農村工業調査』1936.
- 100) 李景漢『定県秧歌選』平教会 1933.
- 101) 周先庚 “定県歴年測驗成績統計結果略述(註)”『民間』Vol. 2, No. 12, 1935.10.25, p.5.
- 102) 諸葛龍 “22年度定県民校卒業成績”『民間』Vol.1, No.15, 1934.12.10, pp. 1-8.
- 103) 熊佛西 “中国戲劇運動の新途徑”『民間』Vol. 2, No. 16, 1935.12.25, p.17.
- 104) 孫伏園 “定県農村露天演劇—熊佛西の劇本「喇叭」”『民間』Vol. 1, No. 13, 1934.11.10, p.18.
- 105) 李召青 “平民的科學教育”『民間』Vol. 1, No. 2, 1934. 5.25, pp. 13-17.
- 106) 王沢民 前掲 (1937)
- 107) 晏陽初 “農村運動底使命及其實現底方法与步驟” <晏前掲書 (1938)>
- 108) 晏陽初『民間』Vol. 3, No. 24, 通信 1937.4.25, p.19.
- 109) 莊沢宣・徐錫麟『民衆教育通論』中華書局 1934, p.51.
- 110) 孫伏園 “十年来的農民報(上), (下)”『民間』Vol. 2, No. 22, No. 23, 1936.3.25, 1936.4.10.
- 111) 章, 許 前掲書 (1935)
- 112) 山東鄉村建設研究院『山東鄉村建設研究院 鄒平実験区概況』1937.
- 113) 晏陽初 前掲 “農村建設要義” p.119.
- 114) 『民間』Vol. 4, No. 1, 1973.5.10, 短評
- 115) 『民間』Vol. 1, No. 1, 1934.5.10, 通信, p.37.
- 116) 陳序経 “鄉村建設運動的将来”『独立評論』No.196, 1936, pp. 16-20.
- 117) 李明鏡 “平教会与定県”『独立評論』No. 79, 1933.12.3, pp. 16-19, “内政部次長の甘乃光とアメリカの某博士が定県に參觀に来た際, 平教会は前日に, 各村に要員を派遣し準備をした。そして私に家畜の新しい畜舎を建て, 会から送った家畜をその中に入れるよう依頼した。また誘蛾燈二本, 種まき機一台を持ってきて, 參觀者に対してこれらを長い間使っていると言うように指示された”とある。
- 118) 吳半農 “河北鄉村印象記” 1934<千家駒『中国農村經濟論文集』上海中華書局 1936> p.401.
- 119) “中華平民教育促進会農村建設育才院縁起”『民間』Vol. 2 No. 4, 1935.6.25, pp. 20-21.
- 120) 李旭 前掲, 生計巡回訓練学校は, 30年に試験的に設置されたモデル農家巡回訓練学校を拡大し, 發展させて組織された学校である。
- 121) 尾上兼英 前掲 p.307.
- 122) 晏陽初 “十年来的中国鄉村建設” <『十年来的中国』1937> p.415.
- 123) 千家駒 “中国農村建設之路何在” <千家駒, 李紫翔『中国鄉村建設批判』新知書店 1936> pp. 97-111.
- 124) 晏陽初『民間』Vol. 3, No. 24, 通信, 1937.4.25, p.19.
- 125) “華北京漢沿線各市県に於ける社会団体 政治団体及其他文化団体並宗教調査”『興亜院調査月報』Vol. 2, No. 2, 1941.2, pp. 270-275, 日本側では定県は “平教会実験区だったため, 人民は共產思想を有する者が多く” 抗戰が激烈である, としている。